

価値を持つ作業に従事する機会を提供したことにより、 学習性無気力状態からの脱却の兆しが見えた事例

○叶内 夢摘¹⁾，原田 伸吾¹⁾，田中 圭介¹⁾

1) 株式会社つむぎ 小規模デイサービスつむぎ

Keywords: 価値，人間作業モデル，高齢者，（学習性無気力）

【はじめに】

今回学習性無気力状態にあった事例に対し，価値を満たす機会と孤独感への介入を行ったことで脱却の兆しが見えたため以下に報告する．なお，この報告について本人の了承を得ている．

【事例紹介】

A 氏，80 歳代男性．要介護度 2．網膜色素変性症により 40 歳代から全盲となるが自立訓練を受け，県外のボランティアへ参加，鍼灸師の資格を取得するなど意欲的な性格であった．デイサービス(以下：DS)は入浴目的で X-8 年より利用しており，X-3 年までは視覚障害者団体の役員を務めたり旅行や同窓会に参加したりしていた．余暇に従事する機会が少なくなっている中，X 年に腰椎圧迫骨折となる．骨折により掃除の役割を喪失していたため DS では役割再獲得に向けて介入を図ったが，家族が担ってくれる環境下であり再獲得には至っていなかった．また運動再開の許可が出た後もニーズである屋内外歩行に向けた運動が継続できていない状況にあり，DS では傾眠傾向，「面白いことがなくなった，長生きしても良いことがない」と話していた．

【作業療法評価と解釈】

人間作業モデルでリーズニングをすると「自分で人生をコントロールする」という価値が明らかとなった．しかし感染症流行やガイドヘルパーの減少という環境変化により，興味のある他者交流や外出機会の減少，趣味人としての役割喪失が起こっていた．加えて依頼したことを家族から拒否されることで価値を持つ作業に従事する機会が減少し，個人的原因帰属が低下している状況にあった．興味のあるカラオケについて教室・発表会への参加は継続できていたが，DS では感染対策から人数を制限しており大人数で行うという A 氏が求める形態での従事できていなかった．そのため価値が満たされておらず，提案しても月に 2 回参加する程度だった．また他者交流機会の減少により，社会的孤立を助長している状況にあった．これらのことの長期化により，学習性無気力の状態に陥っていると考えられた．

【介入方針】

A 氏が求め選択した形態での作業従事機会を通して，価値を満たす機会を増やすこととした．加えて交流機会を増やし孤独感を解消することで，学習性無気力の状態からの脱却を図ることとした．

【介入経過】

感染症流行の状況をみながら，A 氏が希望する大人数でのカラオケや外出の機会を設け提案すると，二つ返事で作業に参加した．作業後には「この曲練習しないと」「今度は 1500 歩を目標に歩こうか」と次の目標を掲げていた．職員との会話場面では積極的に話しており，声のトーンは明るく表情も良かった．他者とのカラオケでは手拍子や合いの手を入れており，終わった後は「ありがとう」と満足げな表情が見られた．

【結果】

自身が掲げた目標に向けての行動が見られた．自宅で毎日エルゴメーターでの運動を継続するようになり，「家で運動はするから DS ではたまに外出の機会を作りたい」と課題設定をするようになった．また大人数でのカラオケが予定されている日以外にも練習を希望したり，新しい曲に挑戦する機会が増えた．

【考察】

今回の事例は，環境制限により自分の人生と出来事をコントロールできると感じる事ができていない状態が長期化したことで目標に向けた努力をやめている状態にあり，A 氏の価値にも反していた．しかし A 氏が選択する形態での作業従事機会を設けたことで，自己コントロールできる経験を得ることができたと考えられる．加えて DS での交流機会を増やし無気力の原因とされている社会的孤立へも介入したことで，学習性無気力からの脱却の兆しが見えたと考えられた．高齢者では学習性無気力を助長しやすいとされており，価値を満たす目標に向けた介入の必要性を感じることができた．